

令和2(2020)年度水稻生育診断予測事業速報No.5 (コシヒカリ、とちぎの星 7月20日調査結果)

令和2(2020)年7月27日
栃木県農政部経営技術課

- ・ 5月上旬移植コシヒカリの出穂期は、7月23日頃からの見込み。
- ・ 県内全域でいもち病が発生しており、防除を徹底する。
- ・ 斑点米カメムシ類（特にクモヘリカメムシ）の発生がやや多い状況。本田内の除草と水田周辺の草刈りを実施し、発生状況に応じて防除を徹底する。
- ・ 6月移植は目標茎数が確保できたら、間断かん水へ移行する。

1 気象概況《7月上旬～7月中旬（宇都宮）》

7月上旬の平均気温は平年より0.9℃高く、降水量は平年比191%と多く、日照時間は平年比25%とかなり少なかった。

7月中旬の平均気温は平年より1.9℃低く、降水量は平年比67%とやや少なく、日照時間は平年比55%と少なかった。

2 調査結果

(1) コシヒカリ(農業試験場調査結果) (表1-1、2)

草丈はやや高く(平年比104%)、茎数は平年並(100%)、葉齢は平年より0.2少ない。葉色は平年より0.3淡く、生育診断値(葉色×茎数)は平年比92%となった。なお、幼穂は1.5cm(平年は10.4cm)となっていることから、出穂は平年よりやや遅れる見込みとなっている。

現地ほ場は茎数が357~482本/m²で、葉色は一部淡いは場が見られる。幼穂は1.1cmから21.8cmで、出穂間近から出穂前18日とバラツキが大きい。なお、葉いもちが2地点、縞葉枯病が4地点、紋枯病が2地点、ニカメイチュウが1地点で確認された。

(2) とちぎの星(農業試験場調査結果) (表1-1、2)

草丈はやや高く(平年比104%)、茎数は少なく(91%)、葉齢は平年より0.4少ない。葉色は平年より0.2淡く、生育診断値(葉色×茎数)は平年比86%となっている。なお、葉いもちが確認されている。

現地ほ場は茎数が307~453本/m²で、葉色はやや濃い。普通植栽培(6月16日移植:足利市)も必要茎数は確保されている。なお、栃木市、足利市の2地点で葉いもちが確認され、紋枯病が5地点のうち4地点で確認されている。

3 技術対策

気象庁地球環境・海洋部発表（令和2（2020）年7月23日）の「関東甲信地方 1か月予報」（7月25日～8月24日の天候見通し）では、“期間の前半は、降水量が多く、日照時間が少ない状態が続く”と予想されている。また、“向こう1か月間の平均気温は平年並及び低い確率ともに40%、降水量は平年並及び多い確率ともに40%、日照時間は少ない確率が50%”となっている。

(1) 水管理

現在の生育ステージは穂ばらみ期であり、間断かん水を基本とし、根の活力向上を図るとともに、葉色の低下を防ぎ倒伏防止に努める。出穂期から開花期は、最も水を必要とする時期であり、水が不足しないように、こまめな間断かん水を行う。

梅雨明け後は高温になりやすく、出穂期から登熟期（特に初期から中期）は稲体を衰弱させ、乳白等の白未熟粒や胴割粒の発生を助長する。夕方から夜間のかん水により、地温を低下させ根の活力維持に努め、高温障害の発生を防ぐ。

なお、高温時の常時湛水管理は高水温により根腐れが起きやすくなるので、足跡に水がたまっている程度まで自然落水したら入水する。

また、高温のほか、風などによる急激な湿度低下なども白未熟粒や胴割粒の発生原因となるため、気象条件には十分注意し、適切な水管理を行う。特に、台風通過後の乾燥した強風（フェーン）が予想される場合は、やや深水とし、脱水による青枯症や白未熟粒の発生を防止する。

【白未熟粒（乳白等）が発生しやすい基準温度】

- ◇ 出穂後20日間の最高気温の平均：32℃以上
- ◇ " 平均気温の平均：27℃以上
- ◇ " 最低気温の平均：23℃以上

【胴割粒】

- ◇ 出穂後10日間の最高気温の平均：30℃以上

普通植栽培（とちぎの星）は、目標とする茎数（穂数）340本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数25千粒/m²の場合）が確保できたら間断かん水に移行する。

麦跡で有機物が多く入ったほ場でガスの発生が多い場合は、根腐れ等の還元障害の発生が懸念されるため、軽めの中干しによりガス抜きを行う。その後も土壌還元による生育障害発生に注意し、症状を確認したら再度軽めの中干しを行う。

(2) 病害虫の防除

ア いもち病（葉いもち）

コシヒカリ2地点、とちぎの星3地点で葉いもちが確認されており、農業環境指導センター発表（令和2年（2020）年7月22日）の植物防疫ニュース（速報No.8）によると7月上旬から中旬にかけていもち病発生が増加している状況にある。

今後の気象予報ではいもち病が拡大しやすい条件の日が続く見込みなので、ほ場をよく観察し発生が認められた場合は早急に治療と予防効果のある殺菌剤を散布する。

また、いもち病が上位葉へ移行すると、穂いもちの発生が多くなる恐れがあるため防除を徹底する。なお、穂いもちの防除は、穂ばらみ期（出穂前7日頃～前日）と穂揃期の2回防除を行う。

イ 斑点米カメムシ類（図-1）

農業環境指導センター発表（令和2年(2020)年7月22日）の植物防疫ニュース（速報No. 9）によると、7月中旬のイネ科雑草地すくい取り調査では、斑点米カメムシ類（特にクモヘリカメムシ）の多い地域ある。

今後、気温の上昇とともに斑点米カメムシ類の水田への飛来や、その後の発生量が急増する可能性があり、加害による斑点米の発生を助長するおそれがある。本田内の除草及び水田周辺の草刈り（水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回）を行ってカメムシ類の発生しにくい環境を整えるとともに、穂揃い期に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は薬剤防除を行う。

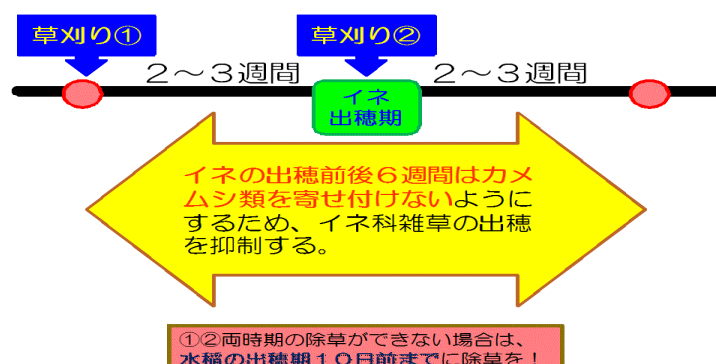


図-1 畦畔2回連続刈りのイメージ

なお、薬剤散布に当たっては、養蜂家へ事前に周知するとともに、ミツバチの活動が盛んな時間帯（午前8時から12時）を避け、ミツバチ被害が懸念される場合は、暴露しにくい形態（粒剤等）の使用を検討する。

ウ イネ縞葉葉枯病

4地点で発生が確認されている。再生稲はウイルスの伝染源やヒメトビウンカの生息場所となるため、収穫後はすみやかにかつ、丁寧に耕起する。

エ 紋枯病

とちぎの星は6地点のうち4地点、コシヒカリは10地点のうち2地点で発生が確認されている。高温・多湿年は発生が多くなるので、病斑が上位葉鞘に進展する前に防除を行う。

オ 稲こうじ病

昨年多発したほ場においては、防除適期（出穂20～10日前）に効果的な薬剤を必ず散布する。

なお、防除適期をはずすと、防除効果が著しく低下する。

カ 害虫

農業環境指導センターが発表する発生予察情報等に留意し、適切な防除を行う。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。